平成24年11月6日　00091号
編集者:佐 藤 寿 春

北見武道通信

北見市幸町８丁目4-4(佐藤整骨院内)
NPO法人北見市武道振興協会事務局発行
直通:090-5986-0839
代表:0157-61-4804　Fax:0157-23-0581
satou.tosiharu@navy.plala.or.jp

ニュースレター【読売新聞優勝旗争奪全道弓道大会開催】

読売新聞優勝旗争奪全道弓道大会が10月28日留辺蘂町弓道館で開催されました。開会式では、大会長である読売新聞北海道支社北見支局の村尾支局長から「昨年この大会開催数が50回を数え、これからもこの大会が更に続いていくことを願っています。」との挨拶で、51回目を迎えた伝統ある今大会の幕開けとなりました。大会には旭川や札幌からの参加者もいて、中学生から一般まで約380名の選手が28m先にある霞的へ8射の行射を行い、その的中数を競いました。北見市弓道会からは24名が参加し、四段以下の部では川戸裕児選手が優勝、鈴木利美選手が準優勝、五段以上の部では渡邊隆錬士が優勝しました。（今野）

【第17回北見市総合武道祭レポート】②居合道

今回は、検証者の三浦清富(せいふ)準範士様にコメントを頂きました。「今年も市立の第2体育館で開催されました。私たちの演武は2番目、出場者は5名と少なかったですが、市民の方々に居合道の一部を間近かに見て頂きました。どの武道も「礼に始まり礼に終わる」ことは共通しています。私たちは日本刀という特殊な霊器を用い、その操法（掟）を通して各人の人格を錬磨している訳です。究極には人として当たり前の事を当たり前に行える人間になろうと人間形成を目指しています。今年の武道祭でも全員正装の姿で演武・検証をさせていただきました。15分間と言う短い時間でしたが観客と一体になった雰囲気の中で真剣にさせていただいたことは有難く幸せに思いました。武道祭は、武道を市民に公開し、理解と支援を願い普及・発展に寄与するという原点を大切にして継続している姿は尊いと思います。役員の方々の企画立案運営は、多くの労力が伴って大変だと思いますが、実施後の反省を次年度に生かす啓蒙が一般市民の心に浸透していくと感じました。」

連載【週刊氷川丸】⑨　氷川丸と北海道航路

病院船解散後、氷川丸は商船に戻る為横浜造船所のドックに入り、約1ヶ月掛けて改装されました。病院船の設備を取り外し、船倉は昔の貨客船時代へ復旧し、船体と煙突は一転、真っ黒に塗り替えられました。日本はまだ GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)から外国航路が許可されていなかったため、氷川丸は船舶運営会の管理下、1947(昭和22)年3月から大阪･横浜/北海道(室蘭･函館)間を結ぶ定期航路に就航しました。北海道の豊富な食料と石炭を本土へ運搬するほかに、復旧が遅れていた鉄道機関の代替手段としても活躍しました。氷川丸は何時も満員だったといいます。食糧難の時代、食料買出しの輸送ルートとしても重要な役割を果たしました。公認の輸送船でありながら、新聞に「ヤミ船」と書かれた事もありました。氷川丸は、約800人の旅客定員をもつ貨客船として、月1回程度の運航が2年余り続きました。1948(昭和23)年7月、海の記念日の催しとして、小樽港(右上写真)で見学会が行なわれたさいには、朝から多くの見学希望者が港に列を成し、乗組員も驚くほど大盛況でした。つづく　**次週は氷川丸復帰までの道のりをお伝えします**

小樽での船内見学会